

琉球大学学術リポジトリ

木材害虫イエカミキリについて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲宗根, 平男, Nakasone, Hirao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20973

木材害虫イエカミキリについて

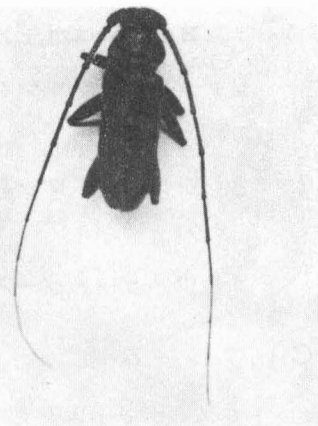
I. まえがき

イエカミキリは琉球、台湾、南支那、フィリッピンなどの地方の乾燥木材の重要害虫として知られている。この幼虫は沖縄本島では地方名「クウムシ」と称し、島産材、ラワン材など建築物の柱、はり、家具ばかりでなく、屋外の門柱、支柱材など乾湿の差のはなはだしい材にまで加害をおよぼしている。特に広葉樹材に害が多く、シロアリ類につぐ被害をおよぼしている。

II. 生活史

成虫は6月から9月に出現する。夜行性であり、夜間に家屋の柱、はり、家具などのへこみや割れ目などに、長さ約1mmの卵を10～30個塊にして産卵し、生存中100～250個も産みつける。卵は5～7日でかえり、2～3日中に材中へ食い入る。1～2週間後には木粉を孔から排出しはじめる。この時から食害が始まるのである。年内食害を続け、途中脱皮を行ない、2令あるいは3令で第1回目の冬を越し、冬季中は活動もにぶく、温暖な気候になると活動を始め、その年内また食害を続ける。3令あるいは4令で第2回目の冬を越し、4令で冬を越した幼虫は3年目の5月以降さなぎになり、続いて成虫になるようである。3令で冬を越した幼虫のあるものは、5令でもう一度第3回目の冬を越し、4年目の5月頃さなぎになり、続いて成虫になるようである。

以上のように産卵されてから、成虫になるまでには、満2～3年を要するようである。



イエカミキリ成虫(おす)

幼虫も夜行性で、昼間は活動を休止し、夜間か、静かな時「ギーチ、ギーチ」と音を発しながら食害を続ける。5令幼虫の大きさも17mm～25mmと大型幼虫となり、さなぎとなって、羽化した成虫は長円形の飛孔を作って、材外へ出るようになる。

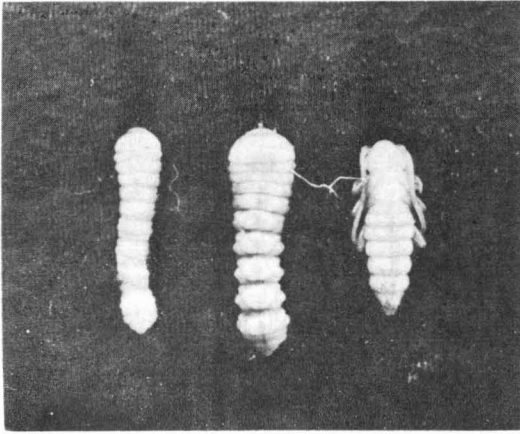
III. 加害状況

卵よりふ化当時は、材の表面近くで食害を始め、時々木粉を排出するが、日数がたつと材内部へ進み、たて、横と食害を続け、その虫糞は材中の空孔へ堆積していく。

広葉樹類でもカシ類、シイなどの硬木を好み、軟材への食害はまれである。食痕も辺材部のみでなく、心材部にも見受けられ、特に心材部の食痕はその大きさも大きく、4令、5令頃には心辺材をえらばないようである。1匹の幼虫の被害と思われる部分でも1～2mの長さにも達するものがある。

IV. 予防法

昔より島産材利用の家屋建築の際は、3～4年前にカシ、シイ、イジュなどの建築原木を山より伐採搬出して、溜池、水田、小川な



左2匹幼虫、右さなぎ

どに水中貯木して、後使用されていた。戦前までその風習が残こされていたが、戦後はスギ材などが主体となり、広葉樹利用による建築の場合も復興におわれて、水中貯木を行なう期間をもつことができなくなった。実験の結果でも水中貯木材には幼虫の浸入が見られず、これは材中の水溶性澱粉類の流出に原因しているようである。「守礼之門」の復元材も、安田山より伐採搬出されたカシ材を龍たん池で長期貯木された材を使用しているので、カミキリの被害は今後も防ぎうると思う。

次に薬品による方法がある。幼虫は表面より浸入してくるので、加工済の材に、組立前に薬品を塗布するか、浸漬させておけば予防に効果をあげることができる。特に近年は建築材としてラワン材の使用が多く、薬品処理を奨励したいものである。処理後ペンキ、ニスなどの塗料使用を行なえば、ますます効果をあげることができる。薬品には下記のものなどがある。

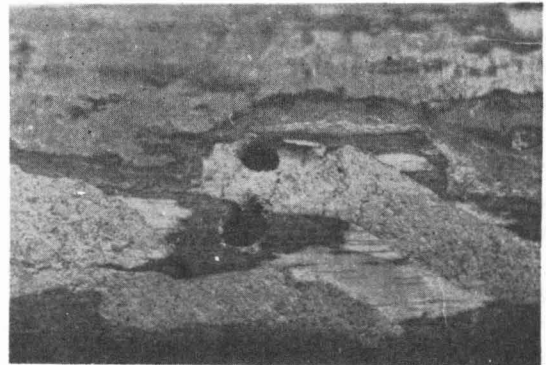
硫酸銅水溶液、亜硫酸ナトリウム水溶液、メルタンW水溶液、オスモース水溶液、クレオソート油溶液、ティンバータックス油溶液、K75油溶液。

V. 駆除法

成虫の発生期は6月～9月である。成虫一匹より産卵される数100～250個もあるので、成虫の捕殺が先決である。これから夜間電灯や、明りのついた室内へ飛んでくるので、一匹残らず捕殺したいものである。

柱、はりなどへ浸入してギリギリ食害進行中の3～4令幼虫は、音によりその位置を確かめ、キリで孔をあけ、スポットでクレオソート、ケロシン、ガソリンなどの液体薬品を流し込み、入口を泥土、紙で密封して駆除する。

1～2令幼虫の浸入は仲々確認できず、適当な探知法はまだ知られていない。



食痕と飛孔

VI. 結び

イエカミキリの概要についてのべたが、これからいよいよ成虫の発生期になるので、各人が自分の家を守る立場から、成虫捕殺を行えば、その被害の進行を最少限にいとめることができる。また近年島産材、ラワン材などの広葉樹使用が増加の傾向にあるが、同材を使用する場合には、水中貯木材か、薬品処理材の使用をおすすめしたい。

(仲宗根平男)